

# 伊勢湾台風の体験談

1959年9月26日21時半ごろ名古屋市西側を通過した巨大台風

## 体験談その1 運河から海水があふれ、父と天井裏に逃げる

■当時23歳 高圧ガス製造業に勤務 三重県四日市市

父母、兄弟4人と四日市市の中納屋桶之町に住んでいた。商売屋がなく民家ばかり。台風の来た前日は、夜の6時ごろ家に帰った。もう風が少し強かった。空を見たら、今までに経験したことのないようなすごい雲の流れで、釣り客を運ぶ渡船業をやっていた天気詳しい父と話をし、6年前の13号台風の時よりもひどいから、母や下の兄弟たちは近くの納屋小学校へ避難して、父と私だけが家に残った。

8時頃になり、家より50メートルくらい東の所に運河から海水があふれ出てきた。その時は、体がぐらつくくらいすごい風が吹いていて、近所の屋根を見ると瓦が1枚ぱっと飛び、それにつられるようにして、ほかの瓦が葉っぱのように舞い上がった。いまさら小学校にも行けないので、父と2人家の中に入った。水はどんどん増えてきたので、押し入れの中段に避難した。もっと増えてくるような感じだったので、押し入れの天井裏に布団を放り込んで2人で上がり、下を見ていた。水は床上まで来て、畳、さらに床の板も浮き上がり、そのうちタンスや本箱がまるでスロービデオを見るように倒れてきた。水が相当のスピードで押し入れの中段より上に来たので、屋根の上に逃げようかと話し合っていたところ、10時頃に増水が止まり、引き始めた。朝の4時頃には全部引いていた。

台風が、満潮になる時と重なった。中納屋桶之町は40戸くらいあったが、全部床上まで水が来た。いろんな物が流れて来たが、特に困ったのは石油会社にあった半分くらい油の入ったドラム缶で、けっこう重量があり、水の中なので家の壁にもたれて来るだけで壁紙が落ちてしまった。いろいろやっている間に夜明けが来て、母や兄弟たちが帰ってきた。納屋小学校にも水は流れ込んだが、量は少なかった。死傷者がでなかったのは、不幸中の幸いだっ

た。その明るる日からは、後片付けで大変だった。家の中にヘドロが2、3センチくらい入っていたので、流し出すのに苦労した。災害が終わった後も、潮の満ち引きで海水が流れ込んできた。今でもそのときのひどい惨状が目に残る。普段の生活を取り戻すのに1週間以上かかった。

四日市市の隣にある川越町の南福崎では、朝明川が決壊した濁流によって15軒ほどの家が流され、14、15人が亡くなったという。すぐに救援物資が来るような時代ではなく、炊き出しもやったように聞いてい



伊勢湾台風の被害状況(三重県資料)

る。災害に対する関心は今ほど高くなく、被害を受けたら自分で全部片付けなければならないような時代だった。

台風が来るという情報は、ラジオで聞いていた。台風13号の時にひどい目にあっているのに、それが一つの経験になり、家の近所の人たちもみんな納屋小学校へ避難した。そのおかげで町からは死傷者がでなかった。6年前に浸水した経験がなかったら、もっとひどい災害になっていたと思う。

(みえ防災・減災センター「みえ防災・減災アーカイブ」より)

## 体験談その2 一瞬で海になった輪中、多くの人が波に飲まれる

■当時 14 歳 中学生 三重県桑名郡木曾岬村 (現：木曾岬町)

住まいは、伊勢湾と木曾川に面した木曾岬村の上和泉という所で、鍋田川の堤防沿いにあった。2年前に新築したばかりの中2階の瓦屋根の家で、父や母、兄弟3人、祖母と6人で暮らしていた。このあたりはほとんどが中2階までの家で、高い建物にすると台風のときに危ないということから、当時は2階建てが少なかった。

台風が来たのは土曜日だった。夕飯を食べた後くらいから、雨風が強くなってきた。とにかく雨、風、雷がすごく、怖いなあと思った。7時くらいに父や母が家のまわりを見回り、玄関や勝手口を守っていた。建てたばかりの家がしなり、雨戸やガラスが外れそうなくらいで、畳を雨戸沿いに積み上げて、風で破られてしまうのを防いだ。

父を手伝い自分の持ち場である玄関に帰ろうとしたら、生暖かい水が土台のすき間から流れてきた。「堤防が切れた、逃げよ」と父から言われ、すぐさま自分の部屋まで、学生服とかばんを取りに行った。母はまだ小さかった妹を抱きかかえていた。小学2年生だった弟が、どこにいたのかは記憶にない。裏の勝手口から逃げようとしていったん外に出たが、流木やまわりの木が倒れていて、2、3メートルの所にある堤防へ上がることができず、戻ろうと思った時には立ち泳ぎをしていた。勝手口から家の中に戻ると、父は「早く逃げなきゃいけない」と言って、祖母を引っ張ろうとしていたが、祖母は柱につかまり、「裏へ逃げたらだめだ、上へあがれ」と言った。祖母の言うままに壁伝いに泳いで階段まで行き、2階へ上がって家族全員の無事を確認した。この間、水が流れてきてから1分経つか経たないかだった。

2階に家族そろって逃げたが、そのうち波が荒くなって1階の天井を打ちつけるようになり、危なくなってきたのもう一段高い2階の座敷のほうに移った。水が2階に上がるまでに数分もなかった。船に乗って揺られているような感じで、家も流されるのではないかと思った。私たちは外へ出ず、家の中にいて逃げ延びることができた。ようやく夜が明け、堤防も大丈夫だったので、なんとか外へ出ることができ安堵した。

台風の翌日は、周りは泥の海で流木やが



伊勢湾台風の被害状況 (三重県資料)

れきの山だった。新聞には、死の海木曾岬村と書かれたという。村外から救援に来た人たちは、見渡す限りの流木と死体が浮いているのを見て、死の海と言ったのだと思う。我に返って村の姿を見た時に、もう住めないみんなが思った。ほとんどの人が、そして友達も亡くなってしまったなあというのが、翌日の記憶だ。それでも、流木を燃やして炊事をし、食事を取ることができたので、私たちの地区はまだ良かった。台風の翌日も、引き潮の時ですら先まで、満潮の時で家の敷居くらいの高さまで水が来ていた。

1週間くらいして、お年寄り、母親と赤ちゃん、中学生以下の子どもたちが集団避難をすることになり、避難先の鈴鹿市までヘリコプターと船でピストン輸送された。私たちは白子の港まで船で行き、昔の海軍航空基地で使われていた飛行機の広い格納庫があり、木曾岬村と長島町の人たちはみんなそこに入り、畳を敷いて避難生活が始まった。それから木曾岬の小中学生たちは、空き家であった通信病院の看護婦の寮で集団生活を送り、勉強を一緒にすることになった。ここで私たちは2ヶ月半くらい避難生活をした。

決壊した堤防を復旧し、村全体から排水して水は引いた。排水が完了したのは11月中頃だったと思う。堤防に囲まれた1つの島のような輪中は、一瞬にして海になってしまったので、どこの地区が早く水が引いた、ということはない。

(みえ防災・減災センター「みえ防災・減災アーカイブ」より)

### 体験談その3 恐怖の一夜

■当時 53 歳 教員 愛知県海部郡十四山村 (現：弥富市)

外の暴風雨は、一層ひどくなるばかりであった。隣組の若者は、消防団の動員をうけてそれぞれ家にはいない。だんだん心細くなってきた頃である。突然、雨戸を強くたたく者がある。消防団員である。「外川の水は、急に水かさが増して、堤防から手が洗える位危険になってきました。緊急避難して下さい」と言い残して立ち去っていった。

ゼロメートル地帯は、堤防によって支えられているだけである。さあ大変なことになった。避難せよと言われたところで、今さらどこに避難することができるのだ。今にも堤防を水が越すぐらい危険に瀕しているというのに。電気が消えた、停電である。急に心細くなった。

丁度その時である。「倉をあけて下さい。倉へ避難させて下さい」と言うNさんの声である。雨戸をあけると一家6人ずぶぬれで、家の中へなだれ込んできた。我々一家6人も急に元気づいた。何でも知っているNさんに倉の鍵を渡した。続いてBさん家族が5人やってき



冠水した弥富駅周辺



高潮と流木で死者660人を出した名古屋市南区白水住宅一帯 (『伊勢湾台風災害誌』より)

て、力強くなった。「昔から木曾川の堤防が切れた時は、この倉へ避難させてもらうことに決まっていた」と言う。水難に備えた水屋は、今はどこの村でもたいてい取り壊されてなくなっているが、私の家は昔から米倉を兼ねて、普通より六尺高く頑丈に石垣を築いた上に建てられてあった。

Cさん家族がやってきた頃には、もう一面に水がひたひたと浸入していた。既に水は堤防を越したのである。私ども夫婦が最後の戸締まりをして倉へ逃げ込む頃には、既に腰のあたりまで水がきていた。西隣の母娘はなぜやって来ないのか心配になって、大声を張り上げたが、風雨の激しい音にかき消されて返事がない。風雨の激しさはつるばかりだ。

急にゴーゴーと怒とうの押し寄せる音が聞こえたかと思うと、水が倉の中に浸み込んできた。七尺以上も水がきたということであろう。大鼓も半鐘も聞こえてこない。急に皆の顔色が変わった。一同を倉の二階へ追いやった。

耳を澄まして聞いていると「助けて、助けてくれ」と引き裂くような女の叫び声が、男の怒声に混じって通り過ぎていく。外はどうなっているか暗い闇に閉ざされたまま、さっぱりわからない。ただものすごく風雨が荒れ狂っているようだった。息を凝らして、時の過ぎゆくのを待つばかりであった。恐怖におののいて誰もしゃべれない。夜がほの明るくなった頃、強い風や雨の音は次第に静まっていった。夜が明け、孤立した水屋の21人を助けに来てくれたのは、材木屋の大船だった。その時、もう自衛隊の舟艇は活躍していて頼もしかった。

真夜中、助けを求めて泣き叫んで流れていったのは、飛島や網田の家もろとも流されて行く人々の声だったという。水屋へ来なかった西隣の母娘は運よく流れてきた舟に乗って流されて行って助かった。

それからまる二カ月、堤防修理が完成するまで村は水浸しであった。

(国土交通省ホームページより)

[www.mlit.go.jp/river/pamphlet\\_jirei/kaigan/kaigandukuri/takashio/3saigai/03taigen/6itiya.htm](http://www.mlit.go.jp/river/pamphlet_jirei/kaigan/kaigandukuri/takashio/3saigai/03taigen/6itiya.htm)

## 体験談その4 伊勢湾台風体験記

■当時 名古屋地方気象台勤務

あの日、朝方は、たまに木々の梢が揺れる程度で静かなものであった。厚い雲だけがやけに激しく上っていた。しかし天気図の上では嵐は始まっていた。「オイッ、あちこちでペナント(平均風速25m/秒を越す風)が出てきたぞ、スゲエナー！」とベテランプロッターが感嘆をこめて叫び声を上げた。

夕方になると、防災や報道関係の人たちが集まり、予報課の現業室(天気図を作成したり、予報や情報を発表する部屋)は慌しい雰囲気になってきた。

情報を発表するたびに、一斉電話でその内容を伝える気象台職員の緊迫した大声、独自の取材をして自社へ伝える報道記者、



浸水した名古屋市南区の道徳通(『伊勢湾台風災害誌』より)

パトカーが来てその無線を利用して情報を伝える県や市の消防関係者。それに、一般の人からの問い合わせに応ずる气象台職員の声などが混じり合う。そのころになると、市内東部の小高い山の上にある气象台辺りでも、次第に風雨が強くなってきた。

雨合羽を羽織った観測員が、背中を丸めて露場（気象観測用の計機が設置されているところ。）へ行き来する。官舎が危ないとかで構内の官舎に住む予報官の家族が避難してきた。当の予報官は、一声かけただけで、そのあと家族の方を見向きもせず天気図の描画に真剣であった。

夜に入ると風雨はますます強まり、窓が唸り声を上げ破れそうになる。みんなで宿直室のタタミをめくって窓にあてがい、五寸釘で打ち付ける。このときは气象台職員だけでなく、県や市の防災関係の人も手伝ってくれた。しかししばらくすると、今度は二階の現業室のトタンの屋根がめくれはじめ、雨が直に飛び込んでくる。

何時頃だったか、屋根の大半はめくれてしまい、建物自体が危険になってきた。

「建物が危険、これ以上の業務遂行は困難で、職員は避難する」旨の電報を台長が、東京管区気象台長や気象庁官に発信した。この時刻になると電気はほとんど切れ、電話も不通。名古屋市内はマヒ状態になっていた。そしてこの瞬間、港付近では記録的な高潮が来襲、貯木場の大木が大暴れして阿修羅を呈していた。

翌日は、北西の風が強く快晴であった。その日が当番であった私は、プロットすべき天気図を広げた。しかし電気はなく、受信器はこわれ、電話は全く不通で、何の入電もなかった。昨晚の風雨にちぎれ飛んできた小枝や葉っぱが、壁といわず机といわず部屋中にこびりついていた。

私たちが、名古屋市の港区や南町あるいは東海地方全域の惨状を知りはじめたのはそれからであった。1日経ち2日経つと被害の大きさがおぼろ気にわかり、4日から5日経ってようやく未曾有の大惨事と知った。

1週間ぐらい経ったところだったろうか。私は久しぶりに構内の寮を出て、ふるさとへの電車に乗った。名鉄で南区の呼続辺りの高架を通過したとき、眼下の校庭にはまだ白い棺が累々と並び、車内はエも言われぬ異臭が充満した。

（国土交通省ホームページより）

[https://www.mlit.go.jp/river/pamphlet\\_jirei/kaigan/kaigandukuri/takashio/3saigai/03taigen/5kireru.htm](https://www.mlit.go.jp/river/pamphlet_jirei/kaigan/kaigandukuri/takashio/3saigai/03taigen/5kireru.htm)

## 体験談その5 海屋の堤防が切れるぞ

■当時 30 歳 農業 愛知県海部郡十四山村（現：弥富市）

当時私は消防団竹田分団長を務めていて、警戒のために各団員に連絡し、善太橋西の元に集合する。昭和19年の東南海地震で高さ半分くらいまで崩れた海屋新田の堤防が気になり、団員と現地に向かう。

海屋排水機場へ行ったら堤防が全長百メートルくらい中心より海側に決壊している。海側を懐中電灯で見ると海水はまだそんなにも高くない。近所の人に知らせなくてはと引き返す時は七時半ごろであったろうか。風雨共うなりを立てている。お互い声をかけ合い、はうようにして飛んでくる瓦をよけながら、堤防屋敷の家々に「海屋の堤防が切れるぞ」と大声で連呼して回る。善太橋の方が気がかり。すでに東竹田堤防上の家々の瓦はほとんど落ち、道の上は瓦の破片でいっぱいである。いつの間にか一緒だった団員とも離れ離れ。下通りを善

太橋に引き返すつもりで西に向かう。Hさんの家の前まで来たところで、もう一歩も進むことはできず、引き返す。自分の家の西側の窓を外から突き破りやっとの思いで真っ暗な家の中に飛び込む。

家の中で一団となって怯えている家族を屋根裏に上げる。大音響とともに家が大きく揺れる。何か人の声。下に降りる。私がつきやぶった西側の窓にHさん家族がしがみついている。家を飛び出し東の堤防に避難するつもりが、水の流れが強く、やっとのことで窓につかまったとのこと。夢中で引き上げる。



愛知県海部郡十四山村（現：弥富市）愛知県保管資料

暈が浮き上がる。家の中を東北より南西にかけて水が一気に通り、戸、障子も全部なし。屋根裏にて、みんな一団となり声も出さず。下はすでに帯戸の棧のところまで水がきている。屋根裏北側の窓から外を見る。いつもなら何もない田んぼの中、懐中電灯で大きく輪をかいているようである。窓より首を出す。「助けて」と声が聞こえてくる。舟か何かの上のようである。助けに行かなくては。とっさに二階にこいのぼりに使う綱のあることに気づく。Hさんに綱をもってもらおう。家族の者が心配するが、無言で窓から外に出る。勝手場から水の中に綱を手に飛び込む。灯を目あてに前に進む。足元がどうなっているのかわからない。途中で大きな木が流れてくるのを避け、灯のところまで無我夢中で泳ぐ。

舟ではなかった。それはUさんのちょうど昨年完成したばかりの家ではないか。大声で呼びかける。屋根の上に何人乗っているのだろうか。子どもが横にいる。すでに死んでいるとのこと。Uさんの家族の姿もない。「あとの人はどうしたのだ」「皆、この家の中で……」この時の気持ち、驚きは言葉で表すことはできない。女性二人を木につかまらせ、持ってきた綱で木をしばり、家の方から綱を引っばってもらおう。ひさしから引き上げる。Hさんは勝手場の棟の上にまたがって綱を引っばっている。裏のWさんも気づき飛び込んで来てくれる。残り的人皆引きとる。Uさんは現場から離れようとしめない。必死に説得、やっとのことで屋根から降り、水の中をいっしょに我が家の方に泳ぐ。ひさしから屋根裏に入る。驚きと、水の冷たさで声が全く出ない。身体が震えてくる。ただ放心状態だ。

いつ頃からか、風も西風となる。屋根に出る。見渡す限り一面水の中。

二、三日ぐらいたってから、Uさんが水の中の家を、近所の方の手を借りて取り壊す。中から亡くなられた身内を出し、舟で海屋の残っている堤防まで運び、だびに付す。立ち昇る煙は、今も頭の中から消すことはできない。

（国土交通省ホームページより）

[www.mlit.go.jp/river/pamphlet\\_jirei/kaigan/kaigandukuri/takashio/3saigai/03-4.htm](http://www.mlit.go.jp/river/pamphlet_jirei/kaigan/kaigandukuri/takashio/3saigai/03-4.htm)